

特71

571

東京
文學同志會出版
大月ひさる選
詩の神
全

大月ひさる選



301218,-000-0

特71-571

詩の神

大月ひさる選

M36.5

DBB-0013

UNIVERSITY OF TOKYO

特7/
571



911.56

77W13881



Figure 1



(一)

露

詩の神

(一)

月のひかりに
月をやどせし
輝やく朝日を

露

ぬれひばり女史編

大月乗山新作

てらされて
露の玉
見てしとき

(二)

はやあとかたの

いとも細き

いとも清けき

その身のありか

風さへ吹きし

(三)

清淨無垢の

花よりまゐる

影もなし

露の玉

身をもちて

さだかなく

そのときは

露の玉

身ながらに

葎や葉上に

花より葉より

(四)

たへなる光を

禪味をさとりし

さたなき浮世は

あぶなき其の身の

さみより無常のものあらじ

身を宿し

先に逝く

身にこめて

露の玉

常なれど

置さどころ

神の詩 (四)

葬

(一)

いとちうるわし

水をきよめし

取らんとせしとき

(二)

巖間に開きし

招くか如く

折らんとせしや

大月乗山新作

蓮の花

花葉かげ

泥に入る

ゆりの花

笑ふめり

谷に落つ

(五) 風暴葬

(三)

池にかわれし

つりに日々行く

えさを取られて

(四)

かほりの高さ

たをりし小女の

袖に血しほを

暴風

鮒と鯉

里わらべ

歸りける

ばらの枝を

指先は

包みけり

大月乗山新作

神の詩 (六)

(一) 雲は南に

地上の風は

人のこころの

うわべは如何に

(二) つるの遊びし

たつみの方に

まだ雨降らぬ

はしり行き

北に吹く

ありさまは

見ゆるとも

朝景色

一の雲

そのさきに

(三) 沖の小舟は

清水に下る

水面にあらはる

たゞそよかせの

御空に歸る

沈みけり

月の神

雲のみね

吹きにしに

月と雲

美人の惨死

大月乗山新作

(一) 頃は三月

十四日

(七) 死徳の人美 風暴

神の詩 (八)

(二)

吾が乗る汽車は
垂井の驛の
前に進みて
不時の汽笛は
動さく間に
折しも窓に
ありしと思ふ

東海道
二三丁
ありしとき
汽關車の
なり始む
人聲の
そのときは

(九) 死體の人美

(三)

はや余が汽車は
如何なる魔性に
汽笛の聲の
年も二八の
しかも下駄をば
線路のそばに
むざんやむざん

とまりけり
魅かれけん
やむときは
たをやめが
はきそらし
休れ居る
嗚呼むざん

汽笛の耳に
彼の女の魂も

旅の薄情

(一)

だんな御無事と
つける宿女の
いともやさしく
たへなる風姿に

消えしとき
消えて逝く

大月乗山新作

双の手を

指先は
ありつれど
見ゆれども

(二)

座敷に通る
直ぐに茶臺と
茶をくむ無言の

(三)

早く茶代を
茶代廢止の
もとよりわれは
わがふところは

そのときは
たばこ盆

あいさつは
知らん爲め
仲間には

あらねども
いつの日も

(四)

ぜに不足の
わが大切の
明日までたのむ
かねをやりたき
いかにやたけに
二階のすみの
用事重なる

(五)

ことばかり
からだをば
ことなれば
こゝろ根の
はやれども
旅のそら
そのときに

(六)

宿女を呼べど
となり座敷に
後まはされし
膳にのぼりし
となりの客の
飯も冷こく
堅き布團に

(七)

答へなく
居りてさへ
夕食の
そのさいは
食ひ残し
したみ酒
重き夜具

(八)

冷こき襟は
夜の寒さは
風にまでも
来しときやさしき
歸る其の日の
先夜さげたる
横にまがりて

垢の爲め
忍べども
にくまれて
宿の女の
あらくさ
細き手は
ふところ手

無情

深山かくれの
日ははや西に
告げて淋しき
ひなの荒野の
ふるき軒端の
なほ昔さへ

山寺に
入りあひを
秋の暮
かたほとり
しのおにも
忍ばれて

垣根にすだく
啼くや霜夜の
かたしき袖を
哀れをそふる
庭の蘆草
軒に巢くひし
いつとはなしに

きりくす
さむしろに
しほる身は
心地せり
あれはてし
つばめさへ
とびさりて

ふたゝびとだに
朽ちし柴の戸
山のつま風
身にしみくと
夢ばかりなる
闇もるものは
空照り亘る

来もやらす
押あけば
音つれて
夜もすがら
手枕の
久方の
望月の

満れば缺くる
月にむら雲
ほいなくくれと
すゑの松山
浪も越すまじ
誓ひし妹脊の
をしのぶすまの

世のならひ
花に風
なるとても
末かけて
越させざと
そのちぎり
むつごとも

またつきなくも
うたてほいなや
浪路遙に
ゆくへも何處
ゆるべの舵を
浮きつ沈みつ
またあふ事は

秋風の
さそいきて
北の海
白雪の
絶えくに
いつしかに
かた糸の

神の詩 (〇二)

よりたる磯の
千々にこゝろを
涙にくれて
身をふく雨に
かけし袖さへ
小島が海士の
乾くひまさへ

浪風
に
くだきつゝ
くれないの
ぬれはてし
もしほくむ
そてならて
なくばかり

(一二) 情 無

冬さり春は
花の色香は
いつしか夏を
音づる雁の
まつぞとしるや
心つくしの
音ふ人も

來ぬれども
うつろひて
杉の戸を
たよりをば
不知火に
古郷に
あれはてし

賤が伏屋に
立つる煙りの
空さだめなく
その行衛こそ

断琴

霞を染むる
嵐のねたみ

あじきなく
ほそくくと
なびきゆく
あはれなりけり

大月・ひさ新作

花さへも
あるものを

空や水なる
雲のそねみの
此の世の中に
人にいかでか
胸にかしらぬ
いかに表は
さりとは思ひ

月影も
あるものを
さすらへる
憂き事の
事やある
見ゆるとも
すつれども

あまりうき身の
いつを涙の
心のどけき
せめて寝る間せ
夢恐ろしく
あやにく誰の
乳ほしさにや

悲しさに
はれ間とて
時もなく
まどろめば
眼はさめて
家ならん
稚見のなく

母なる人の
手に枕して
なにを心に
夜を泣きあかす
その母あやに
稚見の夜寒や
わか子のを

暖たかき
いぬるさへ
みたぬにや
ことあるに
別れたる
如何ならむ
思ひ出て

またも涙の
うきに染みたる
泣くこそ心
昔しの事を
さびしき窓の
あつき涙の
歌ひ出でゝは

一としくれ
我身には
休まるれ
忍ぶ草
あけくれに
ありたけを
樂しまむ

あだなるふじと
口にはよしや
いま悲しさの
うれしき昔し
思ひ出づれば
したしき人の
まみえ初めたる

世の人の
かゝるとも
身にしむも
あればこそ
過し年
なかだちに
其の人は

學びのわざも
心ばへさへ
いまの我身に
柳にのびる
花に暮るしを
空澄み渡る
月にふくれも

淺からて
やさしさに
あらんとは
春の日は
惜みつし
秋の夜は
忘れつし

笑顔ならべし
あたりの人に
二とせ三とせ
過すとも無く
今はいにしの
思ひ見さへも
紅葉なす手に

樂しさを
羨やまれ
夢の間に
過しけり
かすがひも
生れ來て
風車

まはる月日を
その行末を
暮らせしことも
あわにも似たる
思ひかけなき
あだし心に
うきたるとには

指折りて
たのしみつ
うたかたの
人の世と
世の君は
あらねども
あらねども

いのちをかけて
其の心根の
戀るを人の
いかてか思ひ
我より先に
契りかはせし
野邊の若草

慕ひつる
いとしさに
心とほは
及ぶべき
千代かけて
女あり
もえいづる

春の心に
たじかりそめに
慕ひ初めけん
をみな心に
満るまもなく
月にも似たる
われから招く

さそはれて
思ひそめ
いつしかに
秋は来て
かけて行く
身の上を
あさましき

かゝる昔の
誰かは我に
よきえにしごと
よき日迎へて
其の折ふしに
女の品の
ありにし時の

あらんとは
知らすべき
云ふ儘に
まみえたる
目にあたる
二つ三つ
かたみとも

いかてか思ひ
やがて月日を
忘れはてけん
むかしを慕ふ
足らぬ勝なる
めで給ひつる
世はいつまでも

浮はなん
経るまゝに
せの君の
さまもなく
この身をば
うれしさに
此の儘に

すぎゆくものと
人の嫉や
今は我があふ
我から別れ
その女けの
ふたしび思ひ
賤の緒巻

思ふうち
かゝりけむ
せの君に
忘れたる
あさましく
出にしにか
くりかへし

昔を今に
あれかしのものと
すがりつきけり
さすかにすてし
また手にするも
おぼしたびけん
空ふく風に

なすへの
人すてに
幾そたび
女郎花
厭はしく
せの君は
まかせつ

取りあふ様も
かゝりし事の
うき思ひさへ
はしめて知りし
我身の上に
さこそ歎きの
思ひやるだに

見えねども
ありしやと
こさませて
其の昔し
くらぶれば
深からん
いとほしく

初めて涙
さりととも知らぬ
われに心を
我がせの君を
慕ふ心の
それに心の
我がせの君に

おぼえけり
その人は
かけもせて
一すじに
うらめしや
動かさる
あらねども

その折からの
何をか思ひ
み顔のけしき
たゞ悲しさの
我身の無くば
かゝる歎きは
我がせの君の

うれはしく
なやみつつ
見るにつけ
やるせなく
なかくに
なかるらむ
やさしさを

深くも身には
跡に心の
いとし見さへも
たゞこの後の
安かれかしと
涙かちなる
をしと計り

しみつれば
のこるべき
預けつゝ
年月を
祈りしは
今の身に
しのぼるれ

人のなげきを
わがせの君の
仇なるふしに
我と妹脊の
其時よりぞ
よその圓居を
よその稚見

しかすかに
くみわけて
なびかねど
かたらひは
たへはてし
見るにつけ
見るにつけ

空にしられぬ

一としづく

投書

なかれての世をばたのまづ水の上の

あはに消えぬるわが身と思へば

世のさま

子供心を浮世のさまか泣て笑て笑て

泣いて果ては泣くやら笑ふやら

親しき友の新婚に就て 大月ひさ新作

愛に結びし

袖と袖

二人の友の

行く末の

變らぬえにしと

壽ほぎて

心ばかりの

贈り物

君の心に

叶はしと

見捨て給ひぞ

いと我友

赤切符

大月 隆 新作

(一)

しばしまたれな
われ此切符を

わがつまよ
好まねど

わか身も今は

書生なり

(二)

戀しき人の
赤のパスは

みちづれに
取りたれど

乗りし事なき

三等車

(三)

買ふてもらひし
買ふて渡せし

ものよらも
わかむねを

察してあるや

戀人よ

(四)

こしのひゆるも
末のたのしみ

何かせん
あるなれば

人目も耻も

何あらん

(五)

車ははやも

新橋の

停車場へと
又もはづかし

白切符

(一) 余れ今一人

榮耀榮華の

むかし忍ばる

(二) つねに乗り居る

つきにけり
赤切符

全

此の汽車に

身なれども

白切符

上等車

寢臺の中の

ウイスキーには

(三) むかしを思ひ

戀しき人に

渡せし事も

(四) このとき女の

ともの貪苦に

一人寝は

あきたれど

回らせば

赤切符

ありたりき

かなしさは

たへかねて

(五)

われをうしろに
今の乗り居る
只しるものは
ともにうれしく

見すてたり
上等車
汽車のまど
居るならば

以下萬朝一等賞

●口なしの花

わさばひの門と人はいへ

それどころをはつくへきに

さびしくほふ口無花よ

あはれといひてそを抱けば

●鈴蟲

荒れし野末の草の庵に

あふしの心わすれねど

千々の思も之により

厩ついきの垣がくれ

もげる思ひをいかにする

露か涙かはらくと

ふりはへとい來しすい虫よ

三とせのむかし彼の君と

汝がなく音^ねをめてたるに

くるしきものを心あらは

●網代木

川柳なびく根方に

うるはしき姿うつしつ

置く霜の影もうつしつ

少女子も翁のかげも

たかどの夕思ひ出づ

せめてゆけかし彼君のみ墓に

衣洗ふ花の少女の

渡舟棹さす翁

行く水の瀬々にむせびて

くだけは玉とことなられ

をかしきは瀬々の網代木

●萩

さらてもひく手はさなるを

つゆの白玉かざしつゝ

萩の花妻美しや

みこころほとも其まゝに

十五夜の君のまやどりませり

今宵をはれのよそほひに

ほしゑめる立姿たわなる

妙なりとしも見ましけん

つめたき光なげ給ふ

●寄暴風

待て大風よ願あり

血と涙もて作りたる

汝か奇しき力ある

法律と道徳に構ひなく

麥も蒔つけ晩稻も刈て

正しく誠ある者の

彼の高殿と金庫を

大塵あげて蹴り破れ

彼れ破らんは汝のみ

嫁も貰ふて娘もくねて

これてやうく務も済んだ

脚絆鞋で小春日よ

露

月の都を立ちて

兄の白露聲あげて

我清き白菊に身を置て

かゝやく面美しく

も鎌むしらすも若氣にかへり

湯治遊山に出掛やう

兄弟露下界に降りゆく

たのしからずや妹よ

下界の詩人の夢をまよさんと

露子は聲もまよらかに

我身下界に降りなば

戀になやむ其胞をなくともめん



市のねをさん紅つけて

風呂敷包を手に持ちて

わたしや今年が十八で

親のゆるしはなけれど

やさし花の少女の袖により

白粉つけてかきかして

どこに行かんすらすらと

娘のかりぢや花ぢぢもの

ちよごと其所までよめにちよ

●天長節

籬の菊も大君の

軒の御旗も大君の

賤が伏家のうなる子も

千代に八千代を語ふなり

●廢家

惠の露に薰るなり

御稜威の風に靡くなり

祝ひたのしみ君が代の

住みし家居の跡もなく

昔は夏の夕まくれ

今はしげれる萩すゝき

●朝貌

やさしの花よ朝かほは

しばしの朝をさきにほひ

みえじとらそさしほむなり

只朽のこる井筒あり

乙女やくみし化粧水

怨みを汲まん人もがな

露のひまをいそがしみ

日かけをしまぬしれものは

●夜坐寫懷

桐の葉ふるふ風凄く

讀む書とちて見月れば

揚子の浦の舟かじり

五丈が原の草枕

古英雄が夢の跡

今年も空に書籍の中に

劍自づと壁に鳴る

神は逝さぬ海の彼方

渡る鵲宵に見て

流るゝ星を夜半に見て

尋ねまほしき我願

頭を埋めて秋立ちぬ

▲○○○
車夫體の男區役所へ鼠を持ち行き「五錢の切符を願ひます 役人「今年は三錢だよ
車夫「車夫且那モ一錢やつて下さい

●○○○

いさゝ小川のにされるは
花を手折にゆく人の
一日夕暮来て見れば

この水上の小萩原
流渡ると思ひしに
谷より出て、峰にゆく

妻こふ鹿の水鏡

●秋夕

おのづから小萩も咲きて
山里の秋おもしろし
月照みて、友や來めらし
さや我妻

●虹

寫しなからも瀬をわたる

おのづから虫もすだきて
夕暮を笛の音とする
さや酒買ひてこふ

妻こかりし夕立

ハタとやみて笑を含める夕日

向ひの山と彼方の堤とに

今鳴る神は蘇陀利華の如き

民の歡呼に口調をあはせて

●鳥島の健兒

緑滴る椰子の梢に

泣く子の母に抱かれし跡の如

猶涙なる木の葉を照せば

打渡す虹の掛橋

天つ乙女をつれて神樂なしつつ

ゆくらん其掛橋を

日の丸の旗を立てし

鰐近く躍る磯邊に

健兒が銃をば杖に

宮城野の松に吹來て

昔の下に古英雄は

聴くならん思殘し

石は語らん風薫る

暹羅の廣野を

晃ける南斗を眺め

息吹く氣は虹をやなせる

音つれよ鳥の小夜嵐

三百年の眠醒まして

勇ましき南濱の經營を

稲田遙かに空に接ぐ

●媚公の千里の流

雄々しくも分け行く邊り

大和丈夫同胞よ行きて吊へ

三百年の雨風に文字消えし

立つ汝が耳に行け男子

黒龍の流に嗽ぎ

吹き渡る風に嘯く

苦むせる石碑の下に眠るなり

吊ひて黙して聴けよ

石は語らん勇ましき夢の同胞に

長白の氷を認みて

六万里草の繁みを

涼さや如何計りなる

行けや行け大和男子等

胡索克にのみな任せそ

●客中中元

尾花の野邊の奥都城を

漂泊ふ旅の年重ね

心盡しの旅の空

すやけき光の彌増しに

滿州の夏の趣き

誰ぞ此宵は掃ふらん

又魂祭る時は來ぬ

さらても悲しき秋の月

哀れぞしるき今日の夜は

●新益

軒の窓に露ふかし

けふは御霊や來ますらん

何關係あらねども

●日英同盟

東海の叢雲分けて

仰ぎ見てヒマラヤの嶺に

なれもしのぶなき友を

廣き世界に友の死は

我世わびしくなりてけり

さし昇る日の光を

嘯ける獅子勇ましく

血に渴へ狂ひし驚も

噫しく肉争ひし

三万里亞細亞大陸

幕に住む戈壁の夷も



いつしかに翼を收め

狼の群も影なし

空澄みて雲井遙かに

富士の嶺を今ぞ仰かむ

欲眼男「東京電車鐵道の切符の裏面にピールの廣告あるを見て車掌に向ひ「此ピールは何處で引替に成りませしやうか

熱帯の海かけり行く

其釜の火を焚きながら

人もあるかと思ひては

● 月前螢

水の面に影うとさ

戀ならなくに恨みけり

船の底なる湯氣の釜

からさ此世を渡るらん

夏の暑さももの敷かは

螢を追へる乙女子の

餘りに月の冴えたるを

● 残りの幸

よき者となれよと

都にありし二十年はなとせや

旅の姿のさびしさぞ

是や残りの我幸か

● 草すぢぢ

蛇もつろしと書は見し

ばかりの遺言に

今年うらぶれて歸り來し

泣かせ給はん母もなき

夏野の原の草すぢぢ

月の夕のしう露に
一つを取りて唇に

●面影橋

いさゝ小川にかけ渡す
都に望み絶ちし我
瘠せし姿は誰か面影

●流星

きらめく様の美しさ
あつれは甘し神の業
丸木の橋をそとろ行く
底なき底たうつろへる

またも都をうかれ出て
物皆我につれなくて
落ちて流るゝ星一ツ

●黒髪

京を離るゝ女夫つれ
菅の小笠にかくせども
紐に向は照り添へて

今日古郷に来て見れば
まねく尾花も更になく
運命を我に告ぐるかも
人目いとひて黒髪を
結ぶに餘るくれなるの
俯向きがちに船の旅

●磯清水

茶屋の少女に棹操らせ

上りて結ぶ磯清水

映りし影の儘ながら

●眞珠

潮道捲く荒海の

深く沈める眞珠玉

切戸を越して松蔭に

二人の影の映りしを

あはれ残れよ橋立に

千尋の底に物思ひ

これや小島に藻鹽焼く

海士の乙女が月の夜に

●朝顔と夕顔

朝のつゆに朝顔は

似たる光の花ながら

匂ふもゆかし小柴垣



泣いてこぼせし泪なるらむ

天の恵をささぐわけて

神の心のふた方に

船頭の見が市街で遊んでゐると親父が来て「野郎又陸へ出やアかつて馬車に轢れ

るといけねこ「舟の中で遊べ

●花小舟

汀のはちすそと散りて

露と星との乗合に

座の浮世にまみえしと

●繪日傘

近江路を西へと出る

匂ひゆかしの花小舟

さても短かき夜明れば

眠りもゆくか後やをさ

なめてみち

振袖重く匂はせて

『左り京道』とばかりに

●清き夢路

玉や柔き手そのへて

清き夢路に通ふらん

花片一つ音もなく

●松と藤

繪日傘させる乙女子の

しらへし聲の餘り小き

静に眠る幼子の

床にいけたる木蓮の

笑面ある顔に散りかゝる

松は男の立姿

すがりて咲くや藤の花

さなから美しき

●平和の鐘

青葉かくれに芽苔の

里の御寺に金色の

朝夕此の里に

深緑なる其枝に

江戸紫の色と香は

かよわさ女の寐姿に

屋根と白壁ほの見ゆる

佛の像はなけれども

平和の鐘ぞ鳴渡る

●春祝

大内山の春かけて

齡重ぬる鶴の聲

千代に入千代と呼ぶなり

千代萬代と歌ふなり



池に映りし振袖の

彌榮えゆく松の上に

今日の壽待ちうけて

限りなきよを壽まで

紅のあとなつかしみ

あしたゆふへに来て見れば
緋鯉真鯉の打むれて

●嵐

吹けよ嵐よ吹きすさび
彼方に高いや高く
散りて亂れて散りゆくに

●ねたみ

さわぐともなき水の面に

櫻の花のはなひらを
雲の上まで吹き上よ
浮世の塵とならぬ間に

世の味知らぬ乙女子が

白きやうしき手どこの入て

莓の果を採らんとすれば

ねなみの眼光らして

●想忘友

今宵に似たる夜なりけり

真砂に松の影落ちて

甘き情を慕ひつゝ

唐紅に熟まざる

うしや葉影に黒蛇の

寄らば喘んとかまへたり

須磨の浦曲の月清み

人静まりし真夜中を

永遠とこに覺めたる漣なみや

淋しく笑みて佇みて

何處どこに往ゆきし思おもへば



甲「土佐で大蛇が捕れたさうだが灰吹から出たのだらう乙「ウ、其灰吹もたいしたものだホー」

靈たまは不滅と語りつゝ

瘠せせたる君が影法師は

今夜このよに似たる夜なりしが

●山と海

都みやこの塵ちりに惱なやみては

憂うれき苦痛くるうの絶とえどりき

夕ゆふくれ磯いそをさ迷まよへば

『わしか心こころと沖おほ行く舟ふねは

●山家

何を夢ゆめみて詩人うたひは

豊ゆたかかと思おもゆる夕ゆふ煙けむり

羨うらやみたりし山里やまぢも

今いま漁夫いさなをしたひつゝ

遠とほく聞きゆる一ひと節ふしや

樂たのしに見みへても苦くるか絶とへぬ』

里さとの住家すまを稱ほめふらん

樂たのしとひやく馬子うまこの歌

あれも苦痛の現象にして

知らずやこゝも憂世なり

心々にあるものを

●某に與へて

醒めやすき戀に狂ひて

偽多き友を求めて

限なき自然の園に

これも煩悶の聲にこそ

快樂はいづこ鄙都

泣かんより

悔ひんより

歌うたへ

靨ある文の机に

塵の卷の名を

汚れの宮を

清き團扇の

父を助けて

●椎の老木

偉なるかな椎の老木に

親めよ

競ひ

追はんより

賤が家に

畑を耕せ

汝の首は雲を舞ひ

汝の脚下泉湧き出づ

廣き裾には鬼隠る

管て歩まず

不朽の生命顯はるゝ

尊き榮光汝に歸するを

●雀の子

我は得知らず人の智慧

高き肩には鳥憩ひ

管て語らず

唯知る汝は春の日に

輝く若葉は神の冕かんむり

高き御堂の屋根の上

隠れ住むる鬼瓦

鬼の口より見下して

我は得知らず人の智慧

●白藤

日ぬもす日もすから

底にうつれる白藤の

日毎桶さげて

下界騒きて埃立つは

首傾むけとも何事を

清水湧く山の井の

花の清きよ

阿伽汲む若き尼の

此朝はかり汲かねて

●蛙

蛙哇汝は野に鳴く自然の見

緑滴る其蔭に

若やぎの草の香を嗅ぎ

蛙蛙汝こそまことに自然の見

●松前竹枝

都に底の花を見る

野川の邊り若草の

軽く其身を流しつゝ、

さしやぎの流と語る

辛夷^{シヨシ}花開きぬ鯨^{クジラ}近しと

縫ふ針の運は遅し

日一日海霞立ち

行人を促し貌の春風や

(註) 辛夷花咲けば鯨来る此時
漁人多く樺太に漁出す

散らねは何の花の精ぞ

勇む我脊子急く旅衣

糸のごと思ひ亂れん

彌増し花咲添へぬ

老ねは何の若者ぞ

苦しみの後の楽しみ 楽しみ後の悲みと
變る世なれば面白き

その面白き様を見し

●風荒ぶ

雨降りしきる

我行手には

人生の海

廻る舞臺の人の身の
なとて恨まんうつる世の

濤怒る

あゝ凄まじや

野にも山にも

あゝ樂し

されとぞの

散るを奈何

散らず萎れぬ花咲すべく

天然の春

花は愛じ

唯勉めん

子供「母さん噴火といふのは公園の噴水みたやうなの 母「水ぢやない火なんだよ
子供「夫しちや夜見たら奇麗だらう

●瘠たる影

蘆の繁みに沈み行く

短き榮を眺めては

西に背いて佇めば

●雲雀

霞の衣深くきて

汝かうるはしき歌ふふに

夕日の吐ける金色の

いと愁思に堪へざるに

瘠たる影ぞ水に映れる

汝が姿は見えねども

耳かたむけぬものやある

流るゝ泉聲あはせ

蝴蝶を追ふてあくがるゝ

●旅立

幾年の春を旅路の草枕

梅を背にして旅衣

見返る梢書肥え

●春眠

そよく青麥くびかたげ

少女もしばし立とまり

夢に見し故郷の

けふ又立つや蝦夷の地へ

明日こそ花といふ時に

板戸の隙を漏れて来る

松に映りて夢のごと

庭に咲きたる白梅の

美妙き聲に歌ふたり

思ひたゆたよひまをなみ

床にさしこむ朝顔の

夜の名残りはつゞきとも

朝日の影は床の間の

現のごとき折からを

枝にやとまらる驚は

此の世か極樂か

戸をくる音と諸共に

つよき光は嚴かに

覺めて再び現在の

勤務に就ける吾をうながす

●梅か君

けさ春風を先立てい

此庭にあけくれまぢわびく

つしみかねけんうれしさを

昔の唇はほころびぬ

●無常の夕

露の君はとひましぬ

心も若木の梅の君は

かともうせじをまひより

逝きにし母のみしるしに

かたへの岡の草中に

幾在の昔かしらねども

そそぎし親か子かあらん

とむらふ人の影もなく

中に交れる山萩の

たし何となく哀れにて

花たむげんと道ゆけば

いと苦しむる石神あり

此碑にあつき涙をば

今は年古り星かはり

たど繁れるはみたれ草

風のまに／＼ゆられつゝ

あたりの草をはらひつゝ

我花一枝たむくれれば

時にいそく山鳥カキ

●弓張月

み空に懸る弓張月

抛くる力は弱くとも

ありし昔の榮華をば

●清洲の城跡

やかて夕日もかたむきて

かなたの森に聲悲し

光りの征矢を地の上に

胸にそ痛め坐るにも

缺けたるそれに思ふ時

清洲にちかき古城のあたり

落葉片々悲しき聲あり

丘の上なる二つの石碑

言はず答へず苦なめらかに

古しのぶ我衣手に

草徒に深くしけりて

あはれ運命をかこつが如し

ありし昔の様事問へと

唯松籟の颯々として

あつき懐古の涙ぞとしく

甲「彼處の旦那は演説どころか他人の前へ出てハア口利くことも出来ぬエて金員

て議員に成て何するたナア乙「大方又金出して辯護人でも頼むんたんベエ

●霜の朝

枯れたる草の上

そことは霜あり

鶺鴒小さく

尾を折ら振りて

旭日輝き

浅き田の面

氷あり

音も立てず

軽く歩むよ

蒼空開け

下崩きの若草青く

故郷は

昨日賜ひし御文に

氷れる水に墨磨りて

●土筆

梅の香りに薫はして

見えぬる

冷え増しぬらん父君の

熱き情は籠り居れど

書かれし文の淡き濃き

霞の色の紙を展へ

春の玉章佐保姫に

かく其筆は残る雪

煙ふりて萌ゆる草の上に

●初春

者の神夢覚めぬれば

人皆活きて心潔く

齊々としてことほぐさつる

うぐひす送るものなならば

鹿の子斑こまげにおける野の

やさしく立てる土筆つちふでをらん

初霞四方にたなひき

松の樹蔭に朝日浴びて

美はしき時代や今朝の初春

●新年

日逝き月去り夢の間に

梅まだ咲かす雪消えず

又も迎ふる新年や

又も迎ふる新年や

呑みて食ひて眠る間に

我業成らず母老ひんとす

あたり静に夜は深けて

其處に聲なき聲ぞきこ

闇こそ包めをのが身を

そこに色なき色を見る

色なき色や何の色

我が思ふ人美しき人

●ひとこと

朝露踏みて吾味子か

活けたる花のやさしさに

花よ人には秘めよかし

●吹くな風

聲なき聲や何の聲

百合と撫子折りて来て

たゞ一言の洩れつるを

老ひたる父と若き小女と

仲善く話して草刈世話せし

香も高く美しく

● 笛

燃る恨を笛にこめ

百里の北にいかでかは

今年の秋は御取せんと

稲は實りぬいまことに

ふくな風そは情なき

冴え行く月にそとろ吹く

哀れと今宵聞くらんや

秋の月

淋しきに宿を

昔の人にあらねども

松にもたれて夕暮を

秋の月出づ

立ち出眺めけん

末の松山山の上に

歌誦し居れば

田舎者 己等東京へ行つた時案内者が彼は何國の公使館だ此は何國のだと餘り見せ

られたので日本の公使館を見損た

●里の春

汗を臍うらに流したる

玉なす稻は實りたり

太鼓音も聞えつゝ

●木の實

奥山の

田の面に秋の風落ちて

鎮守の森に笛の音

里は秋こそ樂しけれ

瀧見てあれば

あまたたび

風かと思ひ見あくれば

●足尾の秋

毒深き渡良瀬の水漲りて

時は來れど一壑の

足尾の南一帶の

●秋海棠

木の實の肩にあたるあり

近き梢に小猿遊べり

肥えたる土もやせはてつ

稻も實らず見渡せば

十里の荒野たゞ秋の風

朝の露に紅の

折りて一枝花瓶に

似ずやかなはめ初戀に

●何れにか月は澄む

巖に草敷きて

樓に酒汲みて

何れにか月は澄む

ぬれ色清き秋海棠

挿すほどもなく萎れけり

病める小女か命にも

世の外に見る我と

世の中に見る人と

世の外と世の中と

亡き稚兒の

●位牌

まだ此頃と思ひしに

不知不識に手向けたる

●秋の夕暮

深山の奥の炭竈に

ひとり暮せし空兵衛も

白木の位牌納めしは

いたく古びて見ゆる哉

香の煙のしげければ

炭やきつゝ一年を

里なつかしく思ひけん

山を出てたり秋の夕暮

●無縁の墓

寂しけなる秋の野邊に

偽の涙罪の手に

神の恵に菊と桔梗と

●村居

まださに起きて霧罩むる

用ふものなごころは無縁の墓

手向られたる華はなげれど

美しく咲きぬ其そばに

谷に下りつ嗽を

朝飼たうべて

星うすれ行く

牛な聞ゆ

なれし鍬とり

●李鴻章の死をきく

冷たき雨に山茶花の

君は逝さしか我敵に

野に行けは

山の彼方

いさ我も

畑耕さん

落ちて音なき夕暮を

糧を送りし人なれど

何とはなしに淋しくも

友にわかれし思ひあり

夫車の子供「父でも急ぎの用かあれば車へ乗るか」
親父「夫は急ぎなら乗るよ
子供「では御客が奥のかへ

●小猫

人目なき枯野の道に

我後を追たる小猫

からくと咽喉鳴らして

こゝ迄は抱いて来しか

手離さは餓てか死なん

連行かは主や恨みむ

戯れにうつ貴人の

黄金の彈丸のれなくも

翼いためし小鳥かも

ひく茨の叢を

たちもあえなく飛びくくに

つたひゆくなりあはれ小鳥の

●田中氏の直訴

民の聲さく議事堂の

中には餓鬼聲高く

木枯すさぶ門外に

民は飢渴に泣き狂ふ

● 歳晚

なつかしの我が母は

いわけなの我雅見は

憂きと樂しみの中にはや

君を要して十萬の

光あるかな日本帝國

頭の雪もいや増しぬ

脚もやうく立ちそめぬ

今年も暮にけり

白銀の雪の影のあたる

帝の太刀やきたふらん

さえわたりたる鐘の音の

△自轉車に乗た人通行の老婆に道を尋ねると老婆「丁度私しも其邊へ行きますから一緒に参りませう

△幸甚「大分寡婦の不行跡が新聞に出てゐるナ女房「爾ねー私杯は明日が日後家に成ても其様笑れ草は爲ない 幸甚「假令お前が爲るツたつて己が附てゝさせね

まだきに起きと身を清め

小鍛冶の宿のあたりには

天地ともに響哉

This book belongs to M. Mitsui
My dearest Aunt
選者 大田 正三郎

詩の神

大田正三郎の贈り物

三月 後

打有

明治三十六年五月十三日印刷
 明治三十六年五月十五日發行

編輯者 大田正三郎
 發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地
 印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
 印刷所 青木
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
 株式會社秀英會工場
 東京市神田區錦町一丁目十番地
 發兌元 東京市神田區錦町一丁目十番地
 大阪市江戶堀上通
 廣島市西横町

詩の神奥付

電話本局千〇九十三番
 文學同志會大阪支部
 文學同志會中國支部

國立国会圖書館

活 精 神	活 學 談	虛 心 談	精 神 と 力 量	斬 奸 狀	急 務 概 言	東 洋 社 會 黨	最 近 國 家 社 會 主 義	社 會 研 究 新 論	近 世 社 會 主 義 評 論
定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 六 錢	定價 六 錢	定價 六 錢	定價 一 四 錢
立 身 の 事 蹟	高 等 麗 文 集	吞 氣 文 集	戲 曲 妙 文 集	滑 稽 妙 文 集	馬 琴 妙 文 集	日 佛 教 拾 二 傑 傳 論	聖 僧 道 元	禪 學 斷 片	活 禪 錄
定價 四 錢	定價 四 錢	定價 六 錢	定價 四 錢	定價 六 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 五 十 錢

研 學 の 順 序	青 年 の 將 來	作 文 指 南	山 水 記 事 論 說 文	社 交 記 事 論 說 文	高 等 記 事 論 說 文	偉 人 の 膽 力	偉 人 の 生 長 時 代	頓 才 の 詩 人	閨 秀 の 佳 人
定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 六 錢	定價 六 錢	定價 六 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 二 錢	定價 三 錢
婦 人 實 務 錄	女 子 講 本	活 戀	戀 と 死	墳 墓 の 地	失 策 の 半 生 涯	成 功 の 秘 訣	處 世 の 非 録	天 籟 萬 文	小 文 學
定價 四 錢	定價 四 錢	定價 六 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 四 錢	定價 二 錢	定價 四 錢	定價 五 錢

小氣燭	小哲學	本鳴長明海道記	國史 資料 回國雜記	理想の大臣	禪學の奧義	哲學要領	加賀の千代	成效者の苦學	軍隊の側面
定價卅四錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價十五錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅四錢	近刊	定價五十錢 郵稅六錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢

理想の政黨	高等家庭讀本	戀愛の精神	人情の後見	無能の天下	社會學講義	社會學と哲學	吾家の憲法	人生の審美	文學の審美
定價三十錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價六十錢 郵稅十錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢

自然界的審美	婦人の情力	戀愛の文豪	弱者の臨終	英雄の片影	心識活談	詩經新體詩選	改選新體詩	詩の神	學生の苦心
定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢

老子講義新釋	心學養性篇	心學道體篇	心學人間篇	心學道義篇	心學迷悟篇	心學性理篇	心學明德篇	心學靈性篇	俳流の女神
定價廿二錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢



